

広島大学人間生活系コースにおける 家庭科教員養成カリキュラムの検討

—人間発達概論の構想と成果および家庭科内容構成の展望—

村上かおり・鈴木明子・今川真治・平田道憲¹・松原主典
富永美穂子・高田 宏・梶山曜子²・金崎 悠³

(2021年10月5日受理)

Examination of the Home Economics Teacher Training Curriculum in the Human Life
Sciences Education Faculty at Hiroshima University:
Introduction to Human Development and Prospects for Home Economics
Content Composition

Kaori Murakami, Akiko Suzuki, Shinji Imakawa, Michinori Hirata¹, Kiminori Matsubara,
Mihoko Tominaga, Hiroshi Takata, Yoko Kajiyama² and Yu Kanasaki³

Abstract: We have been studying efforts to reconceptualize the curriculum for home economics teacher training in the Department of Human Life Sciences Education at the Faculty of Education, Hiroshima University since 2015. Following the previous report, we clarified the results of the subject “Introduction to Human Development” in 2020, and considered these with the results of the three introductory lessons in the previous report. In addition, based on the epistemology of home economics and the hypothesis of the principle of content composition proposed by the Japanese Society of Subject Content, we examined the future of home economics content composition. We were able to confirm the following common results, accounting for the four introductions: (1) The students understood that the content of the subject (home economics) has an academic basis, and thought about the significance of home economics education. (2) From the proposals for home economics content composition at the Japanese Society of Subject Content, we obtained suggestions for devising and improving the course curriculum. (3) We aim to share the epistemological definition of home economics with teacher training organizations, and to recognize and reconstruct the specialty of the content based on that definition.

Key words: Home Economics Teacher Training, Curriculum, Subject Content,
Human Development

キーワード：家庭科教員養成，カリキュラム，教科内容，人間発達

¹広島大学名誉教授

²大学院教育学研究科教育学習科学専攻教科教育学分野
人間生活教育学領域院生

³国立研究開発法人産業技術総合研究所

1. はじめに

本報告は、2015年から検討を続けてきた広島大学教育学部人間生活系コースの家庭科教員養成カリキュラム改善の取り組みの一環として、前報¹⁾に続き、教

科専門科目の授業の成果を明らかにする。

家庭科の教員養成における教科専門科目の問題点の一つとして、家庭科の意義や目標に基づいて各専門諸科学が「再構成」された形で内容が提供されてこなかったこと、すなわち、家庭科独自の内容構成と背景学問とされる家政学との関連性が不明瞭であったことが挙げられる²⁾。

前報では、このような課題に着目し、専門科目群の再構成を目指して2019年度入学生のカリキュラムから新設された、教科専門科目「衣生活概論」、「食生活概論」および「住生活概論」（図1）各々の受講前後の学生の生活観、教科観等の変容を見取り、授業の成果と課題について考察した。その結果、担当教員が家政学と当該専門諸科学との関係性を概念図として示し、それを意識して授業を行ったことによる効果が認められた。また、多くの学生が3概論の受講後に、それぞれの内容の学びを家庭科教育の意義に結びつけることができていた。

本報では、専任教員が担当する教科専門科目のなかで、人の発達と人相互の関係性に係る内容を扱う科目「人間発達概論」の2020年度の授業成果を捉え、その成果と課題を明らかにし、前報の三つの概論授業の成果と合わせて考察し、日本教科内容学会で提案してきた家庭科の認識論や内容構成の原理の仮説を踏まえて、家庭科内容構成の今後のあり方について検討した。

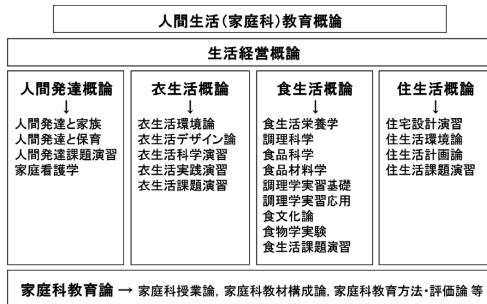


図1 家庭科教員養成科目群の再構成
(広島大学人間生活系コース2019～)

2. 「人間発達概論」の授業構想と成果

(1) 授業の構想意図と概要

人間発達概論は、衣生活、食生活、住生活の各概論と比較して、私たちの日常生活との関連性を意識しにくい側面がある。四年次に履修する教職実践演習においても、これまで、「子どもを育てた経験がなく、周りに子どももいないため、保育の授業が難しかった」

とか「高齢者の気持ちや日常生活がわからないので、高齢者の授業に困難を感じた」などと言った振り返りがみられた。その意味で、人の生涯発達を、自身の経験と結びつけることによって理解することには困難があるであろう。しかし、衣生活、食生活、住生活など、私たちの日常生活は、人と、人を取りまく環境との相互作用そのものであり、環境が人に働きかけてくるアフオーダンスの理解には、人間発達すなわち人が時間軸に沿って変化する(成長、成熟)という認識が必要である。本授業の構想にあたっては、まずそのことをどのように受講生に理解させるかを企図した。

「人間発達概論」の授業計画を表1に示す。この授業の目標は、「ヒトの生涯発達を時間軸と空間軸に沿って概念化するとともに、人間発達について学ぶ意義を考え、人間発達や家族、地域社会との関わりにおける現代的な課題を、家庭科教育と関連させて考えられるようになる」ことである。

表1 「人間発達概論」の授業計画

第1回	ガイダンス
第2回	人間発達と生活科学諸分野とのつながりについて考え、人の発達を家庭科で学ぶ意義を理解する(1)。
第3回	乳児期から学童期までの身体発達を理解し、生涯発達初期の生育環境の重要性について考える。
第4回	青年期から老年期に至る身体発達を理解し、成熟と老化のプロセスについて考える。
第5回	乳児期から学童期までの言語・認知発達を理解し、教育の役割について考える。
第6回	青年期から老年期に至る言語・認知発達を理解し、それぞれのライフステージにおける発達課題について考える。
第7回	乳児期から学童期までの社会的発達を理解する。
第8回	青年期から老年期に至る社会的発達を理解する。
第9回	恋愛と配偶者選択、結婚に対する態度などについて理解し、青年期の課題やその解決法について考える。
第10回	結婚生活と夫婦関係、親となる準備等について理解し、家族や家庭の課題と解決法について考える。
第11回	家族と家族ケア、ライフサイクルについて理解し、地域社会とのつながりにおける課題と解決法を考える。
第12回	親と子の関係、家族の協力と協働について理解し、豊かな生活とは何かを考える。
第13回	保育関連の実習を通じて、ヒトの生涯発達について再認識する。
第14回	保育関連の実習を通じて、家族や家庭の役割等について考える。
第15回	まとめ 人間発達と生活科学諸分野とのつながりについて考え、人の発達を家庭科で学ぶ意義を理解する(2)。

第1回目のガイダンスにおいては、受講生が、人間の発達を科学的に追究する学問として、一般的に想起するであろう「発達心理学」と、本授業科目との相違について認識させることを意図した内容を含めた。もちろん発達心理学も、ヒトの心理と行動を、発達という時間軸と、人を形成し実在化している諸側面に着目して複層的に捉えようとするところにおいては、本授業科目における発達の捉え方と類似している(図2)。また、心理学の細分化された専門分野の中には「生涯

発達心理学」として、個別の発達段階ではなく、生涯を通じた発達の全体像を研究対象とする分野もある。

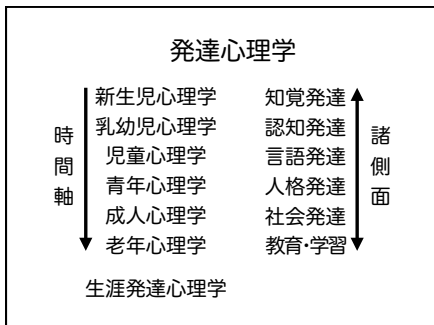


図2 発達心理学における発達軸と人を構成する諸側面

しかし本授業では、人の生涯発達を、人間と人間（個人）を取りまく複層的で重層的な環境、すなわち自然環境、人工的環境、人間行動的環境との相互作用の中で捉え、いずれの側面においても自然・社会・人文諸科学の体系と関連していることを意識させるようにした（図3）。

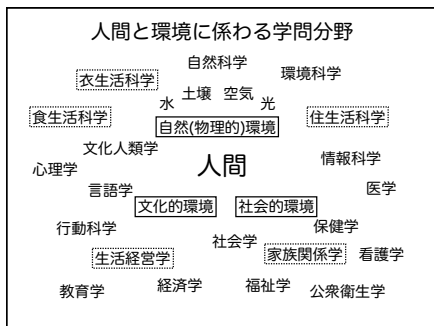


図3 本授業構想における人間を取り巻く複層的環境と関連諸科学の位置づけ

そして、（学校教育課程に設定されている教科の一つである）家庭科の中で人の発達について学ぶ意義を考えさせる際、背景学問としての家政学を認識させるようにした。また、家政学の目標は「人間と人間を取り巻くさまざまな環境との相互作用について、人的・物的両側面から追究し、生活の向上に貢献する」ことであることを理解させ、人的側面からの環境との相互作用の学びの必要性について考えさせた。

第2回の授業では、「人間発達と被服行動・環境」、「人間発達と食行動・食環境」、「人間発達と住生活・住環境」という内容で、人間発達と日常生活との関連性について、家政学の各構成分野との関係を例示しながら

考えさせるようにした。特に、中学校、高等学校家庭科の教科書を題材としてその内容を提示し、受講生それぞれのこれまでの家庭科での学びが、自分自身の発達といかに関連していたかと、これから先の自身のライフコースを見つめる上で、どのような意味を持つものであるかを意識させるようにした。

第3回以降は、人の発達における時間軸（成長）と空間軸（環境との関わり）とを意識しながら、乳幼児期、学童期、青年期、成人・老年期における身体発達、言語・認知発達、社会的発達を学習するようにした。さらに、恋愛と結婚、家族・親子関係、家族と地域社会とのかかわりなど、人と環境との関わりについて広範に学べるように内容を配置した。それらの内容構成のうち、恋愛と結婚、家族関係、親子関係などについては二年次に開講する「人間発達と家族」で、また、妊娠・出産、初期の親子関係、子育て、子育て環境である家庭保育と集団保育、保育者の役割などについては、三年次に開講する「人間発達と保育」で、より充実した学習内容を提供するため、概論である本授業の中では簡略に触れるに止めている。

また本授業は、家庭科教員免許取得のための要件である「保育学（実習を含む）」の対象科目としているため、保育関連の実習を実施することになっているが、コロナ禍の制限により、当年度においては親子関係と保育に関連するビデオを視聴させ、ビデオ内で示されたさまざまな問題について熟考させるとともに、自身のライフコースと関連させながら論述することを求め、実習に代えざるを得なかった。

15回の授業を通して、受講生が人間発達の様相の概略を習得し、人は環境（人的環境、社会的環境、自然環境）と切り離しては存在し得ないことを理解するとともに、人間発達を、本コースの他の領域（衣生活、食生活、住生活、生活経営、環境）との関係の中で理解できるようになることが期待される。

（2）受講前後の調査結果の比較、分析

「人間発達概論」を受講するにあたり、高校までの家庭科の家族・家庭生活、保育に関する学習およびこれまでの大学生活や一年次のコース専門科目の学習を踏まえて、自分のライフコースを考えていく上での課題をイメージできたか、また受講後に自分のライフコースを考えていく上での課題を解決するために、どのような知識や取り組みが必要であるかをイメージできたかについて調査した（図4）。図に示すように、「人間発達概論」受講前には、自分のライフコースを考えていく上での課題を具体的に1つはイメージできると回答した受講生は8名（38.1%）であり、それより多

い9名(42.9%)の受講生は、あまりイメージできないと回答していた。しかし受講後には、受講前にはいなかった、具体的に複数イメージできると回答した受講生が6名(28.6%)おり、半数以上の受講生が、具体的な(複数~1つは)イメージを形成することができるようになった。他方、あまりイメージできないと回答した受講生は9名から4名(22.7%)に減少した。

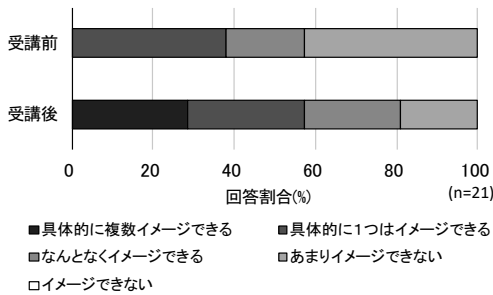


図4 自分の課題(受講前)とそれを解決するための知識や取り組み(受講後)に対するイメージ

次に、「人間発達概論」を受講するにあたり、これまで高校や大学で学習したこと、および社会の現状を踏まえて、現代社会の家族・家庭生活、子育てに係わる課題をイメージできたか、また受講後に現代社会の家族・家庭生活、子育てに係わる課題を解決するために、どのような知識や取り組みが必要かをイメージできるようになったかを問うた(図5)。図から、具体的に複数イメージできる受講生が増加し(4名→7名)、なんとなくイメージできるだけの受講生が減少しており(9名→5名)、社会の課題を解決するための知識や取り組みに関して、曖昧だったイメージが具体化された様子が確認できた。

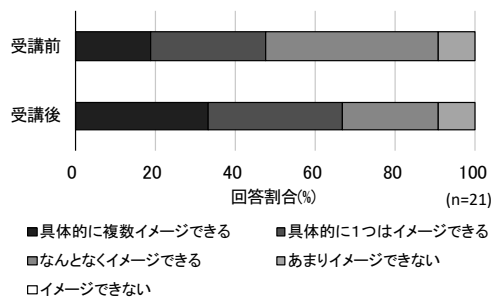


図5 社会の課題(受講前)とそれを解決するための知識や取り組み(受講後)に対するイメージ

以上の結果より、家族・家庭生活、保育に関わる事象、現象に関する本授業を通じ、自らのライフコース

だけでなく、それらに関わる現代社会における課題に対する意識と、それを解決する必要性および方策に関する意識は高まったと考えられる。

図6に、これまでに受講した教養科目や「人間生活(家庭科)教育概論」などコース専門科目の学習を踏まえて、これから学ぶ「人間発達概論」に関連する学問をイメージできたか、また受講後に人間発達に関する学びにどのような学問が関連しているか理解できたかを問うた結果を示す。受講前に具体的にイメージできていた受講生はおらず、なんとなくイメージできていた受講生も7名(33.3%)だけであった。一方、あまりイメージできなかった受講生は9名(42.9%)、イメージできなかった受講生が5名(23.8%)であった。しかし受講後には、どのような学問が関連するかに関して理解を示した(とても~少し)受講生は17名(81.0%)となったが、あまり理解できなかった受講生も4名(19%)みられた。

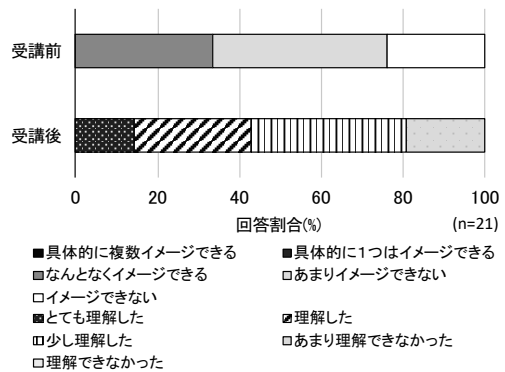


図6 「人間発達概論」に関連する学問に対するイメージ(受講前)と理解度(受講後)

図7に、これから学ぶ「人間発達概論」と、衣生活、食生活、住生活、生活経営、人間環境などの生活関連諸領域との関連についてイメージできたか(受講前)と、受講後にそれらの領域との関連から、家庭科教育の意義を感じたかを問うた結果を示す。受講前には、両者の関連について具体的にイメージできていた受講生はおらず、なんとなくイメージできていた受講生が7名(33.3%)いただけであった。一方、あまりイメージできなかった受講生は13名(61.9%)、イメージできなかった受講生が1名(4.8%)であった。しかし受講後には、人間発達概論と、その他の諸領域との関連から、家庭科教育の意義を感じた(とても~少し)と回答した受講生は19名(90.5%)のほり、あまり感じなかった受講生は2名(9.5%)のみであった。

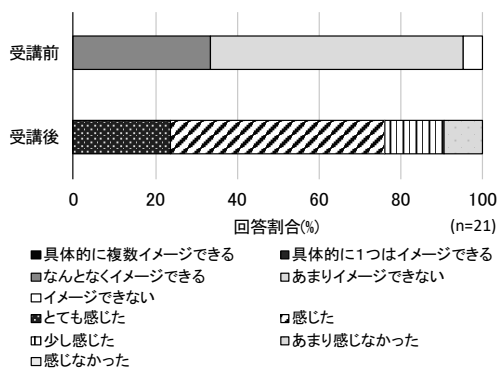


図7 「人間発達概論」と他の諸領域との関連についてのイメージ（受講前）とそれらの関連から家庭科教育の意義を感じたか（受講後）

図8に、これから学ぶ「人間発達概論」の中で、どんなことが家庭科の題材や授業の構想に役立つかをイメージできたか（受講前）と、受講後に、この授業が家庭科の題材や授業の構想に役立つことをイメージできるようになったかを問うた結果を示す。受講前から具体的に1つはイメージできた受講生は1名（4.8%）しかおらず、なんとなくイメージできた受講生（8名、38.1%）を合わせても半数には満たなかった。さらに、受講前にはあまりイメージできない、イメージできないと回答した受講生が合わせて12名（57.2%）いたが、受講後には、あまりイメージできないと回答した7名（33.3%）のみとなり、逆にイメージできるようになった（とても～なんとなく）受講生が14名（66.7%）と増加した。

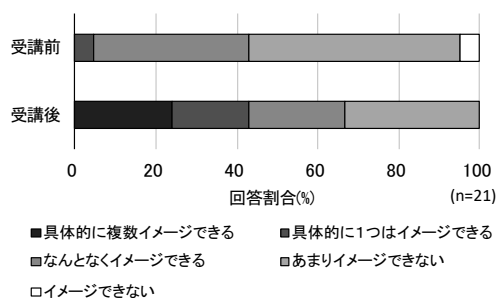


図8 「人間発達概論」が家庭科の題材や授業構想に役立つかに関するイメージの受講前後の比較

(3) 次年度に向けての改善計画

本授業が目標とした、「ヒトの生涯発達を時間軸と空間軸に沿って概念化するとともに、人間発達を学ぶ意義について考え、人間発達や家族、地域社会との関わりにおける現代的な課題を、家庭科教育と関連させ

て考えられるようになる」ことについては、概ね達成できたのではないかと考える。しかし、図8に見るように、人間発達を学ぶことが、家庭科の題材や授業構想にどのように役立つかをイメージすることにおいては、受講生も困難を感じたように思われる。その理由の一つは、本節初頭でも述べたように、人の生涯発達の全過程を、学生自身が現時点で体験することは不可能であることによるかもしれない。しかし、生涯発達の理解のためには、学生一人一人が、自身の日常生活の中で出会う親子や乳幼児、高齢者に目を向けること（観察）を通して、異世代の人々に共感し、その日常生活を共体験することが求められよう。そのために、本授業および関連する専門科目において、幼児とふれあう機会を得ることや、行動観察の手法等を学習することが必要である。しかし昨年度はコロナ感染予防の観点から、実際に人と関わる直接的な体験をさせることができなかった。このような制限の中で行える体験的内容として、乳幼児期の発達を学ぶにあたって赤ちゃん人形を用いた実習を取り入れたり、高齢者の身体発達（老化）の理解のために高齢者体験グッズを用いたりするなどの工夫が必要となるかもしれない。しかし学習内容の多さや時間的制約もあり、それらの実習を直ちに取り入れることは困難でもある。今後、学習内容の精査を行い、よりコンパクトで効果的な授業の進め方を検討する必要があるだろう。

3. 四つの概論の成果と課題

広島大学教育学部人間生活系コースにおける、家庭科教員養成カリキュラム改善の一環として、専門科目群の再構成を目指した。2019年度に新設された、教科専門科目「衣生活概論」、「食生活概論」、「住生活概論」および「人間発達概論」各々の授業の受講前後の学生の生活観、教科観等の変容から、成果を検証した。その結果、4科目ともに、家政学と当該専門諸科学との関係性を強調したことによって、教科（家庭科）の内容は、学問ベースで構成されていること、その学問として、家政学を認識していることを確認できた。今後履修していく専門科目の学びとの関連や家庭科教育の意義を考えることに結びつけようとしていることも確認できた。

具体的な授業題材や教材をイメージすることは、教科の指導法や教材論での学びを待つことになるが、多様な諸学問の成果を生活創造に結び、生活主体を育成するという特徴をもつ家政学が家庭科の背景学問として存在することを理解したことは、教科内容の概論科目履修の成果と言えるであろう。一方で、コロナ禍の

影響により、計画通りに実践的・体験的な学習方法を展開できなかつたために、プロジェクト学習やパフォーマンス課題を十分に効果的に行うことができず、成果に影響があったことも事実である。今後は四つの概論の内容、方法を照合して、再検討することも必要ではないかと思われる。

4. コースカリキュラムにおける家庭科内容構成の検討

(1) 日本教科内容学会における家庭科内容構成に係る七つの仮説

日本教科内容学会では、それまでの先駆的研究の成果を発展させるために、2016年から5年計画で教科内容構成に係るプロジェクトを進め、全教科担当者で協議、検討の上、各教科の内容構成の七つの仮説提案を行った³⁾。家庭科は、平田を中心として、広島大学チームが担当した。以下にその成果を述べる。それに基づいて、コースカリキュラムにおける家庭科内容構成をさらに工夫、改善することについて検討する。

日本教科内容学会のプロジェクトでは、教科共通の七つの仮説テーマについて、各教科で検討し提案がなされた。仮説1は「教科の認識論的定義」であり、家庭科は、「家庭科は、生活事象や生活の総体を対象として、生活事象を構成する要素に関連する知識と技能を、空間軸と時間軸の視点から科学的に理解し、生活自立、生活問題発見・生活問題解決、生活創造を生成するために、理解した知識と技能の統合を指向する。」とした。

教科としての家庭科の認識対象は生活事象や生活の総体である。家庭科の背景学問としての家政学の定義では、認識対象を「家庭生活を中心とした人間生活における人と環境との相互作用」と表現している⁴⁾。生活事象は多様な要素から構成されているが、家庭科では、これらの要素に関連する知識と技能を科学的に理解するという方法によって生活事象や生活の総体を認識する。ここで、科学的というのは、家政学の定義における「人的、物的両面から、自然・社会・人文の諸科学を基礎として研究」することに対応している⁴⁾。このとき、家庭科では、生活事象を構成する要素を空間軸と時間軸の視点から理解する。空間軸というのは、個人、家族、地域、社会の空間的広がりからの環境との相互作用を意味し、時間軸というのは、生まれてから死ぬまでの個人のライフコースという観点と、他世代との相互作用という観点を意味している。

以上のような認識を通して、教科としての家庭科が生成する内容は、生活自立、生活問題発見・生活問題

解決、そして生活創造である。家庭科では、それらの内容を生成するために、理解した知識と技能の統合を指向する。

仮説1の認識論的定義から、次の「仮説2 教科内容構成の原理」が導かれる。第一に、生活事象を構成する要素を整理する必要がある。認識論的定義における家庭科の認識対象は生活事象であるが、生活事象の総体は広範囲にわたるため、教科としての家庭科においては、生活事象の要素を整理する必要がある。小・中・高等学校新学習指導要領(2017年、2018年告示)では、小・中・高等学校での内容の系統性や接続が見えるように、生活事象を構成する要素が、「家族・家庭生活」、「衣食住生活」、「消費生活・環境」という三つの枠組みに整理された⁵⁾。この枠組みは、学校教育における家庭科の教科内容構成の原理としては妥当である。

第二は、生活事象を構成する要素に関連する知識と技能を、空間軸と時間軸の視点から理解するという内容構成原理である。生活事象を構成する要素に関連する知識と技能は、家政学の定義にもあるとおり自然・社会・人文の諸科学を基礎としている。学校教育の教科という視点からも、多くの教科と関連している。これらを、家庭科内容構成という観点から考えると、空間軸、時間軸の視点から理解することが家庭科内容構成の原理となる。空間軸というのは、個人、家族、地域、社会の空間的広がりからの観点からの環境との相互作用を意味しており、家政学の定義においても人と環境との相互作用として表現されている。しかし時間軸については、家政学の定義では表現されていない。時間軸というのは、生まれてから死ぬまでの個人のライフコースという観点と、他世代との相互作用という観点を意味している。生まれてから死ぬまでの個人のライフコースの観点とは、個人の視点で、現在までの生活、現在の生活、将来の生活という時間的観念に基づいて一生を見とおすということである。家庭科ではさらに、この観点を、現在の生活における他世代との相互作用という考え方に発展させる。つまり、小・中・高等学校の児童・生徒からみた、乳幼児の理解、高齢者の理解などは、時間軸に沿った内容構成の原理である。

第三は、家庭科の達成目標に関連する内容構成の原理である。教科としての家庭科が生成する内容、つまり教科の達成目標は、生活自立、生活問題発見・生活問題解決、そして生活創造である。この達成目標は、どの教科にも求められているものであるが、家庭科は、生活事象そのものを対象とするという認識論的定義により、この達成目標が教科の存在意義であるといえる。上で述べたとおり、生活事象を構成する要素に関連す

る知識と技能は、他の多くの教科と関連している。したがって、家庭科は、家庭科だけにとどまらず、理科、社会、保健体育など他教科の内容を生活自立、生活問題発見・生活問題解決、生活創造につなげるという統合的な内容構成をもっている。

仮説2の原理にしたがって、「仮説3 教科内容構成の柱」をまとめると次の六つになる。①生活事象を構成する要素（家族・家庭生活、衣食住生活、消費生活・環境）、②生活事象の空間軸（個人・家庭・地域・社会の相互作用）、③生活事象の時間軸（生涯発達、他世理解）④生活自立、⑤生活問題発見・生活問題解決、⑥生活創造

仮説3の教科内容構成の柱に基づいて、「仮説4 教科内容構成の具体」として、次の6項目をあげることができる。①家族・家庭生活（生活経営学、生涯発達学、家族・家庭関連科学、子ども・高齢者関連科学）、②衣食住生活（衣生活関連科学、食生活関連科学、住生活関連科学）、③消費生活・環境（生活経済学、消費関連科学、環境科学）、④生活自立、⑤生活問題発見・生活問題解決、⑥生活創造 このうち、①から③は生活事象を構成する三つの要素に対応し、空間軸と時間軸の視点から理解する。④から⑥は家庭科の達成目標に対応しており、①から③の具体的内容のなかで理解を深めることになる。

家庭科における教科内容構成の具体を検討するうえで次の二点に留意する必要がある。第一は、教科内容構成の具体には知識と技能が含まれていることである。上記①から③は、どれかが知識でどれかが技能というように分けられるものではなく、①から③のすべてにおいて、知識と技能が含まれている。第二は、教科内容構成の具体は、①から③が独立に存在するのではなく、空間軸と時間軸の視点から理解することによって、相互に関連づけられることである。たとえば、一生涯を見とおすという時間軸の視点は、①の生涯発達学だけで扱われるのではなく、乳幼児の衣食住生活、高齢者の消費生活というように、②や③においても扱うべき内容である。

内容構成の具体④から⑥は家庭科の達成目標に関連する教科内容の柱に基づいて、教科内容として具体的に構成される項目である。ただし、現時点では、これらの具体的内容に対応する直接の学問はなく、①から③の具体的内容のなかで、④から⑥に結びつけることが必要である。

「仮説5 教員養成学生に育成される能力」は、次の5項目を提案した。「生活事象を構成する要素に関連する知識と技能を、空間軸と時間軸の視点から理解する能力」、「知識と技能を児童・生徒に指導できる能

力」、「知識と技能を生活自立につなげる方法を指導できる能力」、「生活問題発見・生活問題解決について理解し、指導できる能力」、「生活創造について理解し、指導できる能力」

これらの能力のうち、知識と技能を児童・生徒に指導できる能力については、仮説4における①から③に基づいて育成することができる。これに対して、知識と技能を生活自立につなげる方法を指導できる能力、生活問題発見・生活問題解決について理解し、指導できる能力、生活創造について理解し、指導できる能力は、仮説4における④から⑥に基づいて育成することができる内容であるが、仮説4のところでも述べたとおり、これらの具体的内容に対応する直接の学問はない。したがって、これらの内容を、家庭科の教科内容構成を考えるうえで、どのように保障するかは大きな課題である。

「仮説6 教科と人間（個人・社会）とのかかわり」は、次のとおりである。家庭科と個人とのかかわりは、次の二点である。第一は、生活事象を構成する要素に関連する知識と技能を空間軸と時間軸の視点から理解することである。第二は、生活問題を発見し、解決方法を探り、生活自立を図り、よりよい生活を創造する原理を理解することである。

家庭科と社会とのかかわりは、次の二点である。第一は、自立、あるいは自律した生活者を養成することである。第二は、そのことによって、市民生活の質、家庭生活の質の向上に寄与することができることである。

「仮説7 教科内容構成の創出による教科専門の授業実践」の概念的・理論的観点は次のように提案した。

内容構成に対し次の二つの方針をとる。

方針1. 生活問題を発見、解決する学習過程を15回の授業の文脈を重視して展開する。

方針2. 授業内容を仮説4の6要素で構成する。

6要素の扱い方の留意点

- ・家族・家庭生活、衣食住生活、消費生活・環境という生活の要素と営みの理解や関連の知識・技能の習得を、生活自立、生活問題発見・生活問題解決、生活創造につなぐための生活実践課題を設定する。
- ・15回の授業を通して自分の生活を振り返り、実践的な学習や協働的学習の中で課題解決を繰り返し、評価（自己評価、相互評価）して、さらに解決策を改善するような学習過程の意義を認識して学習を進められるよう構成する。

(2) コースカリキュラムにおける家庭科内容構成の工夫、改善

広島大学教育学部人間生活系コースでは、中学校技術・家庭科の家庭分野および高等学校の家庭（共通教

科および専門教科を含む)の免許を任意で取得させている。取得して教員となる学生の勤務校は、中学校、高等学校(普通科、専門科)、特別支援学校と多様である。家庭科内容構成の在り方を問う場合、義務教育の中学校技術・家庭科家庭分野から高等学校の専門科に設定されている専門科目の指導まで、多様な指導場面をイメージして、内容構成を工夫する必要がある。もちろん、深い専門性と高い技能を備えていれば、どのような指導場面でも適切に指導できるかもしれない。しかしながら、そのような優れた専門性を、各校種、生徒実態、学校カリキュラムに配慮し、内容の優先性を検討、考慮して、指導のストーリーを組み立てて、「再構成」することは、実際にはベテラン教員でもかなり難しいように思われる。

ここで、上記に示した家庭科教員の資質・能力としての「深い専門性や高い技能」とは何かを問う必要がある。教科内容学会の提案の中で、「仮説3 教科内容構成の柱」に基づいて、「仮説4 教科内容構成の具体」には、各柱に対応する学問が示されている。これらの諸学問に精通していること、その学問に対する独自のアイデンティティをもっていることを「深い専門性や高い技能」と言うのであろうか。「教科」内容の専門性には、それに加えて、関連の複数の諸学問を俯瞰して専門性を客観視できるような能力が問われているのではないかと。そうでなければ、多様な生活実態の中にある生徒たちに対して、適切な課題設定や学習環境の提供は困難であることは明らかである。これらの学問は、家政学の一部でもあるが、完全に包含されるものではないことも理解しておくべきかもしれない。そのような意味で、専門諸科学の内容を家庭科の内容として再構成することは必要不可欠である。

教員養成、教師教育の中で、教科教育に関わる者は、学校教育課程における自教科の立ち位置、他教科との関係、さらに自教科の独自性を問いつける姿勢が必要である。さらに組織として、それらの認識を共有してカリキュラム検討を続けることが重要な方策である。そのために、上記の仮説1-7は役立つであろう。

教師教育の初期段階にある教員養成では、各柱に対応する専門諸科学の情報の「枠組み」と精選された要素を理解させるとともに、教科の目標達成を生徒の実態に合わせて保障するために、必要な内容を精選、構成する能力を育成することが求められる。不易の部分を強調することでもあり、内容知のみではなく方法知も求められるということである。そのような能力の獲得は、生活が変わり、情報がとどめなく増えたとしても、家庭科教師として、あるいは指導的立場にある生活主体者として、自分で必要な情報を得る能力や情報

を取捨選択できる能力を向上させていくことにつながるであろう。

以上のことから、四つの概論において、パフォーマンス課題のストーリー性のある展開の中で、改めて、仮説1の家庭科の認識論的定義に照らして、内容の精選を行い、仮説7の二つの方針が有効に機能しているか検討し、再考することが必要となる。

5. まとめと今後の課題

2019年度入学生から改訂したカリキュラムにおける教科専門科目のうち、2020年度後期に開講された「人間発達概論」の構想を関連の学問体系とともに示し、前報の三つの概論と合わせて、四つの各概論受講前後の学生の生活観、教科観等の変容を調査によって明らかにした。また、授業者が捉えた授業の成果と課題、および日本教科内容学会のプロジェクトに関わって、コースメンバーで提案した七つの仮説に基づいて、今後の各概論の改善の方向を探った。

四つの各概論受講後の共通の成果として、次のことが挙げられる。家政学と当該専門諸科学との関係性を強調したことによって、教科(家庭科)の内容は、学問ベースで構成されていることを理解させることができ、その学問として、家政学を認識していることを確認できた。また、今後履修することになる専門科目の学びや家庭科教育の意義を考えることに結びつけようとしていることも確認できた。今後は四つの概論の内容、方法を照合して、再検討することも必要ではないかと思われる。

日本教科内容学会のプロジェクトにおける家庭科内容構成への提案から得られた教員養成コースカリキュラムの工夫・改善への示唆は、家庭科の認識論的定義を教員養成組織で共有すること、その定義に基づいて、内容の専門性を問い、再構成することであった。

家庭科の学びは、他教科に比べて汎用的スキルにアプローチしやすい特質をもっている。しかしながら、その独自の学びやアプローチを可能にする内容横断的な展開が見られる教員養成カリキュラムの例は少ない。教科固有の知識・スキル、学び方および資質・能力が汎用的スキルと往還しながら獲得されていく過程で双方を結び付けているのが、教科の本質としての見方・考え方であり、家政学の学問的特徴である。またその見方・考え方は、カリキュラムを通しての学びや汎用的スキルの訓練の中で鍛えられ、教科固有の資質・能力を高めていくことにもつながる。

昨今の生活者が直面する課題は、広範囲に頻繁に形を変えて出現し、その要因は複雑な背景をもっており、

解決のためには多面的な視点で方策を講じる必要がある。家庭科はこのような現代社会の特徴を理解しつつ、生活者の視点で様々な問いと向き合わせる必要がある。生活の要素を個別に取り上げるだけでなく、内容横断的に扱うことによって、複雑な生活課題の要因を総合的に捉えることが可能になる。

家庭科では、生活の課題を見出し、生徒が自分や家族にとっての最適な解決策を追究する過程を体験させることが教科独自の役割である。そのためには、家庭科教師は、題材としての内容のまとまりを捉えるだけでなく、題材相互の関係を意識し、学びの文脈をつくるのが効果的である。問題解決的な学習もそのような長期的なプロセスの中に位置づけたい。中学校の「課題と実践」や高等学校の「ホームプロジェクト」の学習も、そのような学びの文脈の中でこそ効果的に展開されるであろう。それによって、オーセンティックな学びを提供しうる家庭科カリキュラムの実現が可能になる。

このような「生活の多面的理解」および「生活者育成」という目標に照らして、今後の家庭科の教師教育では広範な教科内容の構造化と多様な方法論的アプローチを学ぶことが課題となる。

今後、家庭科という教科の枠組みを、社会や生活の変化や学力観の変化の中で、柔軟に捉えていくためにも、教科内容、教科の指導法いずれも、現在の学問体系や、その内容体系に注視していく必要がある。

謝辞

元横浜国立大学の工藤由貴子先生および上越教育大学の佐藤ゆかり先生には、日本教科内容学会のプロジェクトにおける家庭科提案について、貴重なご意見を賜りました。佐賀大学の岡陽子先生、福山市立大学の正保正恵先生には、関連の共同研究の中で、本報告に多くの示唆をいただきました。ここに厚くお礼を申し上げます。

本研究は、JSPS 科研費 JP19K02814 の助成を受けたものです。

引用・参考文献

1) 鈴木明子, 金崎悠, 村上かおり, 富永美穂子, 松原主典, 高田宏, 今川真治, 梶山曜子, 平田道憲「広島大学人間生活系コースにおける家庭科教員養成カリキュラムの検討—衣・食・住生活概論の構想と成

- 果—」広島大学大学院人間社会科学研究科紀要「教育学研究」第1号, 2020, pp.136-145
- 2) 科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金) 課題番号19K02814(代表 鈴木明子) 交付金によるシンポジウム資料(2019年10月20日)
- 3) 日本教科内容学会編『教科内容学に基づく教員養成のための教科内容構成の開発』あいり出版, 2021
- 4) 日本家政学会編『家政学将来構想1984: 家政学将来構想特別委員会報告書』光生館, 1984, p.32
- 5) 文部科学省『高等学校学習指導要領(平成30年告示) 解説 家庭編』教育図書, 2019, pp.8-9
- 6) 鈴木明子, 村上かおり, 福田明子, 木下瑞穂, 今川真治, 松原主典, 高田宏「家庭科教員養成におけるプログラムモデルの構築に向けて—教科教育と教科内容および教科内容相互の架橋の検討—」広島大学大学院教育学研究科紀要第二部第64号, 2015, pp.307-316
- 7) 鈴木明子, 村上かおり, 梶山曜子, 「家庭科教員養成における教科観の構築に関する研究—広島大学人間生活系コースにおけるカリキュラムの検討・改善をめぐる—」広島大学大学院教育学研究科紀要第二部第65号, 2016, pp.257-264
- 8) 鈴木明子, 村上かおり, 梶山曜子, 今川真治, 松原主典, 高田宏「広島大学人間生活系コースにおける家庭科教員養成カリキュラムの検討—教科観を育むガイダンス授業の構想—」広島大学大学院教育学研究科紀要第二部第67号, 2018, pp.289-298
- 9) 村上かおり, 鈴木明子「広島大学人間生活系コースにおける家庭科教員養成カリキュラムの検討—家庭科内容学としての衣生活内容の構想—」広島大学大学院教育学研究科紀要第二部第67号, 2018, pp.299-308
- 10) 日本教科内容学会第7回研究大会(紙面開催) 課題研究発表資料「家庭」の教科内容構成を基にしたシラバス提案と批評文 平田道憲・鈴木明子・村上かおり・富永美穂子 広島大学(人間生活教育学コース協力による)(批評) 工藤由貴子・佐藤ゆかり(2020年8月7日)
- 11) 鈴木明子「連載コンピテンシーベースの授業づくり(8) 家庭科の資質・能力育成におけるカリキュラム水準の文脈づくりの意義」(指導と評価, vol.63-3, 2017, pp.59-61)
- 12) 日本家政学会第71回大会(徳島・四国大学)ポスター発表資料, 2019